

特

集

東日本大震災

矯正職員による救援活動

しま 島

こう 孝

いち 一

法務省矯正局成人矯正課企画官

三月一七日、震災後久しぶりに自宅から出勤した私に突然仙台への出張命令が下された。「国は被災地に対してできる限りの支援を行う」ことが政府方針となったこと

頼し、先発隊として私の他五名の矯正局職員が、東京拘置所の車両で仙台へ向かった。

とから、矯正局として被災地に対し実施可能な支援内容の調査を目的する出張であった。出発の準備を進める中、マスコミ報道で伝わる被災地の深刻な食料事情や連日届けられる非常食もなかなか被災者には行き届かない実情を少しでも救援できないかという検討が行われ、我々矯正職員が今やれる救援として、救援物資の提供と炊き出しを行うこと、そして実施場所を石巻拘置支所が所在する石巻市とすることが急ぎよ決まり、直ちに支援部隊として東京管区及び大阪管区に管区機動警備隊の派遣を依

この矯正職員の派遣は、矯正施設警備救援規定に基づく宮城刑務所の警備応援の他、国家公務員法第一〇一条第二項の「重大な災害に際し、職員を本職以外の業務に従事することを妨げない」に基づき、被災地である石巻市で炊き出しを行い直接被災者を救援するという、矯正職員にとっては初めての任務であった。派遣命令の時点では、石巻市のどこで、どんなものを炊き出しするかなど具体的なことは決まっておらず、それ以前に災害救助の実施者である自治体に炊き出しの申入れを行い、了解を取り付けなければならないという課題があったが、未

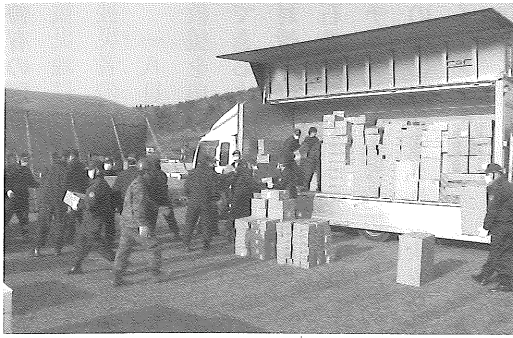
曾有の国難と言われるほどの非常事態であり、とにかく被災地に行かなければ何も始まらない状況であったので、被災者の救援を最優先に考えた結果の派遣決定であった。

一八日、宮城県庁の災害対策本部において石巻市への救援を申し入れ、了解を得たが、県から市への取次ぎができるような状況ではないので、翌日直接石巻市の災害対策本部へ行き同様の申入れを行うこととし、午後から、石巻拘置支所へ向かった。三陸自動車道の矢本インターチェンジを過ぎた辺りから、流された車や船などが田畑の中に取り残された状況を目の当たりにする。石巻河南インターを降りカーナビの案内に従い、石巻拘置支所へ向けて走行したところ、道路が崩れてなくなっており、迂回することとなった。もちろん信号機も動いていないので、車の走行にはカーナビより方向感覚が頼りになる。路肩には無数の流された車があり、その車の間をすり抜けるように走行し、石巻拘置支所へたどり着いた。支所長から「外堀まで津波が到達し庁舎前の駐車場が冠水したが、庁舎玄関が海側を向いていなかったたので庁舎内は冠水しなかった」との説明を受けた。職員の中には、一番でマイカーを運転中に津波に遭遇し、山側の道路に逃

げ込み助かった者もいた。

支所長の案内で石巻市全体が見渡せる日和山公園へ向かった。石巻城の跡地にできた公園で石巻市の景観地である。当日が春を告げるような快晴であったことから、澄み切った青い空や光輝く海の素晴らしい景観と、一面灰色の瓦礫^{がれき}に埋まっている見たこともない陸地の被災状況が目に見え込んできた。どちらも現実なのだ。支所長の説明によると自衛隊は生存者の救出を優先して行っていることから、数日前にやっと遺体の引上げが始まったところで、まだ瓦礫の下で遺体まで搜索されていない状況であった。何も言葉が出てこないが、とにかくこの被災地で、できる限りのことをやらなければならないという使命感を感じた。

その日の夜、東京・大阪の管区機動警備隊員、運転職員、矯正局職員と総勢六〇名を超える被災地支援部隊が仙台管区に集結した。大阪隊は、朝八時に出発し、途中スタッドレスタイヤに交換するなどして、一四時間かけての移動であったが、元氣良く到着の報告を行い、待っていたかのように先着していた東京隊は、荷物の積卸しを手伝うなど、素晴らしい連携である。雪が散らつく氷



救援物資の積卸し作業

点下の夜にもかかわらず、熱気を感じるほど士気高く作業を行っており、寝静まっている民家から苦情が出ないかと心配するぐらいの活気であった。

一九日、早朝から石巻市へ運ぶ救援物資の積み込み作業が行われる中、私は石巻市へ出発した。支所長と石巻市役所前で待ち合わせ石巻市災害対策本部へ入り、半ば強引に、作業中の職員に「法務省から被災地の救援活動に来ました」と名刺を差し出した。驚いたように立ち上がったその職員は、石巻市の総務部長室へ案内してくれた。私は、総務部長さんに救援物資の提供と避難所での炊き出し支援を申し入れたところ、総務部長さんは、突然法務省が石巻市へ支援活動に来たことを驚いていたが、「是非支援してもらいたい」との回答で、炊

き出しの場所については、翌日、石巻総合運動場に設置されている救援物資受付班と調整することとなった。やっと石巻市への支援の足掛かりができ、午後になって、支援部隊が朝から積み込んだ救援物資を石巻総合運動場へ運び込んだ。

二〇日の朝、炊き出しのための物資、炊飯機器などの積み込みが始まる。矯正にとって初めての試みだ。私は、炊き出し場所の調整を行うため石巻総合運動場へ先発した。炊き出しの話が、市役所から救援物資受付班へ繋がっていないだろうと考えての行動である。

石巻総合運動場の救援物資受付班は、石巻市役所の産業部が担当しており、自衛隊の大きなテントの中で仕事をしていた。私は、昨日、総務部長さんへ伝えた同じ内容の話をしたところ、産業部の職員から「炊き出しの關係は市役所の福祉課で行っており、ここでは避難所を紹介できない」との説明を受けた。「また市役所へ行かなければならないのか」と思ったところ、我々のやり取りを傍らで聞いていた産業部の次長さんが、避難所を紹介することを請け合ってくれ、親切にも市役所の福祉課へ繋がりにくい携帯電話で何度も連絡を取って、炊き出し

場所を「万石浦中学校」に決めてくれた。次長さんに地図で場所を示されたが、市街地から離れた海岸の近くで、すぐ横に万石浦がある。次長さんの説明では「昨日に道路が繋がったばかりの場所で、避難所には一、〇〇〇人くらいの避難民がいる」とのことであつた。やっと炊き出し場所が決まり、良かったと思いつつも、市街地から離れた場所へ被災地域を横切るように繋がったばかりの道路を走行して行くことに不安を感じたので、石巻拘置支所から道案内として一名の職員に応援してもらうことをお願いした。

後発の支援部隊と石巻総合運動場で合流し、石巻市役所で石巻拘置支所職員に同乗してもらい、一路万石浦中学校へ向かった。牧山トンネルを抜け左折し、被災地域へ入っていく。支所職員の説明によると、「現在走行している道路の南側の地域が、一番多くの遺体が見付かった地域である」とのこと、破壊された家屋が多く、道路の所々に車が横転しており、車一台がやっと通行できるような状況で、この先に避難所があるのかと疑いたくなる思いだった。私は先頭のワゴン車に乗っていたが、後続車両は、大型バス、マイクローバス二台、四トントラ

ック二台で、狭い道をすり抜けるたびに後続車両が気になるが、信じられない見事なハンドル捌きで大型バスがついて来る。しばらくして、路肩の車がなくなり、前方の道路が見渡せるようになると同時にカーナビの画面に万石浦中学校が映し出された。

やっと万石浦中学校に到着した私は、校舎に入り受付の職員に名刺を差し出し、炊き出しに来たことを伝えた。当然ここでも県庁や市役所と同じ説明を行わなければならない。さらに県の了解を得て、市の総務部長さんの要請を受け、産業部次長さんから紹介されたことを付け加えての説明だ。そんなことを考えていると、避難所の管理者である市議会議員に紹介され、私は四度目の説明をした。市議会議員は、法務省が来たことを驚くとともに、当日は避難民に食料の配布が行われていなかったもので、すぐに炊き出しをしてほしいとのことであつた。

校舎横のグラウンドに管区機動警備隊員が整列し、掛け声とともに作業が始まった。今にも雨が降りそうな空で気温も低かったが、隊員が元氣良くてきばき炊き出しの準備を進める中、避難民が集まってくる。レスキューキッチンで沸かしたお湯でレトルト食材や缶詰スープを

温め、配布用のパンやフルーツ缶詰などを準備し、校内放送で炊き出しの開始を告げたところ、すぐさま長蛇の列となった。隊員たちは避難民の申し出た食数を配布したので、手に持ちきれないほどの食料を抱えた避難民から安堵の笑顔がこぼれる。震災後の避難民の食料事情は、一家族当たり「おにぎり一個」、「カップヌードル一個」という状況だったそうで、カップヌードルは、お湯がないのでベビースターラーメンのように粉々にして食べていたそうだ。飽食の国と言われている日本で、考えられない食料事情であり、今日この日に炊き出しに来て良かったと思った。

午後二時頃から始まった炊き出し作業は、休む間もなく四時間が経過した。夕闇の中、撤収作業を終え来た道を戻ろうとしたところ、大潮で道路が冠水し、タイヤが半分くらい水没してしまいそうな状況になっていたが、支所職員が、避難所の地元住民から冠水の少ないルートを聞き出してくれ、その道案内で無事帰ることができた。仙台管区に到着後、荷物の積卸し、炊飯機器や作業テーブルの洗浄を行い、そして給油のため高速道路内のサービスエリアに向かうなど、隊員たちは朝早くから夜遅く

まで献身的に働いており、本当に感心した。

二日、燃料であるLPガスがなくなりかけていたので、朝から何度もガス屋に足を運んだところ、熱意が伝わったのか、何とか貴重なLPガスを調達することができ、東京隊が万石浦中学校で、大阪隊が石巻拘置支所で炊き出しを行うため出発した。

先発した東京隊は、午後一時頃に万石浦中学校に到着し作業の準備にかかったところ、小学校低学年から高学年の五、六人の男女の子供たちが、既に列を作って並んでいた。「準備するのに一時間くらいかかるので、寒いから校舎の中で待っていなさい。今日も一杯食事を持ってきたから心配ないよ」と声を掛けたところ、高学年の少女が「私たちは、いつも食事をもらうのに二、三時間は並ぶので平気です。おじさんたちの仕事を見ていたい。きびきびして見ていて楽しい」と言って、その場に並んでいる。しばらくして、私は、クラッカーを渡した。すると、「おじさんたちは、どこから来たの。どんな仕事しているの。給料は幾らもらえるの。敬礼ってどうやるの」などと質問攻めにあった。敬礼は、我々の動作で特にかっこ良く見えたらしく、低学年の子供たちも私の



炊き出しの様子

動作を真似て身に付けようとしていた。午後二時頃から食事の配布を始めたが、昨日より多くの人が並んでおり、加えて隊員の人数が半分になったことから、更に忙しく瞬く間に時間が過ぎてゆく。時間に追われた作業の中で、みかんの缶詰の余った汁を排水溝に捨てていると、避難民から「もったいない」との指摘を受けた。当然の指摘で、配慮が足りなかったと思った。

一方、大阪隊は、午後二時頃から石巻拘置支所で炊き出しの準備にかり、町内会を通じて近隣の住民に声を掛けたところ、大勢の人たちが列を作った。食料事情は、避難所より近隣住民の方が厳しく、食糧をもらいに避難所へ行ってもなかなか入手できないとのことで、並んでいるときから泣いている住民がいた。また、一度家に帰り着替えて二度目の

列に並んでいる住民もいて、かなりの食料が近隣住民に配布できた。

昨日の大潮の件があったので、両隊とも暗くなる前の午後五時頃、それぞれ帰路に着いた。

二日、東京隊が万石浦中学校へ向かい、大阪隊が、宮城刑務所の応援業務に就いた。

この日が最後の炊き出しになるので、大阪隊のトラックも加わり、四トントラック二台に食糧を満載にして出発し、午後一時頃到着して準備にかかった。昨日の子供たちは並んでいなかったが、準備が進むにつれ、待ちかねた避難民が列を作っており、連日の評判でものすごく人が多くなりそうだった。

食事の配布を矯正局職員が校内放送で流した頃には、校舎の裏側まで人の列ができていた。主食は五目御飯で、隊員たちが手際良く容器に御飯を盛り付け配付していくが、列がどんどん長くなるので、足りるかどうかが心配になり、何度も列の長さを確認に行った。昨日の倍以上の食糧を積んできて、なくなるまで配るつもりで来たが、配り始めて二時間半後、徐々に列が短くなり、配る食糧も少なくなってきた。最後は、御飯だけの配付となり、

我々の炊き出し作業は終了した。

すぐさま撤収作業が始まるが、帰りの積荷は少ないので、瞬く間に作業を終え一時の休憩を取った。たばこを吸う隊員たちの顔にはやり遂げた笑顔が浮かんでいるように思えた。一緒に煙草を吸っていた教員の「煙草を売ってほしい」との依頼に、喫煙している隊員のほとんどが煙草を差し出していた。本当に優しい隊員ばかりである。

隊長の「集合」の号令とともに点検が始まる。「異常なし」の報告が続き、「別れ」の号令で解散となった。グラウンドは静まり返っており、さつきまでたくさんの人が長蛇の列を作っていたとは思えないほどだ。私は、職員室に向かい、在席していた一名の教員にお礼を伝え、その後、グラウンドを車に向かって歩き出した。校舎二階の教室のベランダから四、五人の高齢の女性が手を振って見送りをしてくれたので、振り返りそちらの方に手を振り、再び車に向かうため視線を校舎一階の入り口に戻すと、そこに少女が直立不動で敬礼をしていた。映画やドラマの撮影ではない現実の世界で、一人の少女が、我々を見送るために敬礼をしているのだ。私はその場で



敬礼をする少女

敬礼をした。少女は敬礼動作をやめない。私は、振り返り車に向かいながら、目頭が熱くなるのを感じた。昨日、「敬礼を教えてほしい」と言っていた少女なのか。車の横に着いたとき、もう一度振り返ったが、まだ同じ姿勢で敬礼を続けており、私は再び敬礼をして車に乗った。動き出した車の中で同乗者から「まだ敬礼を続けている」という声が聞こえてきたが、私は、もう少女を見ることができなかった。

仙台管区に向かう車中、私は大震災に対する全国の矯正施設の迅速な救援活動の素晴らしさを痛感していた。救援物資については、週末の金曜日の午後に発生した震災にもかかわらず、全国の矯正職員が昼夜を問わず救援物資を集積し、一三日以降順次、被災した矯正施設へ届けられた。また、被災地の支援については、急きょ派遣決定された初めての任務であり、しかも、まだ寒く余震が続く、瓦礫などが散乱する危険な状況にもかかわらず、

黙々と救援活動に取り組み、被災者に感謝されるとともに事故なく任務を終えることができた。いずれの救援活動も全国の矯正職員の使命感と献身的な努力によるものである。

今日、被災地の救援活動を無事終えることができ、そして、少女から敬礼の見送りを受けたことについて、全国の矯正職員の皆さんにお礼を言いたい。

「ありがとうございます」（敬礼）

追記

後日、日本経済新聞の記者が、少女を捜しに万石浦中学校へ取材に行き、記事（四月一六日朝刊）にしてくれました。その際に取材した避難民が、「法務省が来てくれたのは忘れない。三日間のメニューを全部覚えていた」と言っていたこと伝えてくれました。また、その後、毎日新聞の記者も取材に行き、少女の敬礼を再現した写真とともに記事（五月三一日夕刊）にしてくれました。ありがとうございます。

矯正協会◆出版案内◆

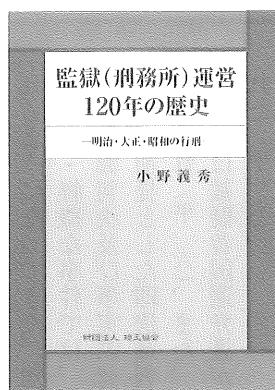
申込・問合せ TEL: 03-3319-0652
(出版課) FAX: 03-3387-4454

監獄(刑務所)運営120年の歴史

—明治・大正・昭和の行刑—

法学博士 小野 義秀 著

A5判・上製本・792頁
定価 5,000円



戦後日本行刑実務に長く携わり指導的立場にあった筆者による500点に及ぶ写真・絵図をふんだんに使用しながら解説する明治・大正・昭和の行刑史書